

## 小学校外国語活動における動機づけと情意要因に関する研究と実践 —実証研究の蓄積と今後の展望—

西田 理恵子  
大阪大学

安達 理恵  
愛知工科大学

カレイラ松崎 順子  
東京経済大学

---

### 概要

2011 年度，小学校外国語活動が公立小学校に導入され，その目的がコミュニケーションへの積極性，異文化への関心と情意要因に焦点が置かれていることから，これまでに児童の情意に焦点を置いた実証研究が行われ，研究成果が蓄積されつつある。本稿では，これまでに明らかになっている小学校外国語活動における児童の動機づけと情意要因に関する実証研究を総括し，教育的示唆，研究の限界点，当該研究分野における今後の展望について述べる事を目的とする。

**Keywords:** 小学校外国語活動、動機づけ、情意要因、実証研究

---

### 1. はじめに

2008 年 1 月，学習指導要領の改訂に伴い小学校外国語活動の位置づけがより明確となり，2011 年 4 月には高学年に対して年間 35 時間の必須化が義務付けられた。全国の各公立小学校においては，ベネッセ教育開発センターの『第二回小学校英語に関する基本調査（教員調査）報告書』（2010）によると，概ねスムーズに活動が展開されているといえる。文部科学省の示す新学習指導要領に基づく小学校外国語活動の目標は「①言語や文化について体験的に理解を深め，②積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り，③外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら，コミュニケーションへの素地を養う」である。このため，小学校外国語活動の目的は，必ずしも英語力の発達を促すものではなく，言語に慣れ親しませることや，学習に対する情意的側面と考えられるコミュニケーションへの積極性に焦点が置かれている。異文化への関心とコミュニケーショ

ンへの積極性は学習者動機づけと関わりがあるために、 これまでに様々な基礎研究や実践を介して行われた教育介入型研究が実施されてきた。本稿では、 最初に、 第二言語習得分野における動機づけや情意要因の先行研究を概観し、 小学校外国語活動に関する国内のこれまでの実証研究を総括していく。

## 2. 先行研究

### 2.1 動機づけ

1960 年代以降に第二言語習得理論の分野において個人差要因の研究が多く実施され、とりわけ言語習得における動機づけは個人の学習に大きな影響を及ぼすと考えられ、半世紀に渡って研究者・教育者の関心を集めてきた。1960 年代以降にはカナダの心理学者である R. Gardner らによって、instrumental orientation- integrative orientation といった概念を中心として、動機づけの構造を取り上げた研究が盛んに行われた。異文化への接触・態度：動機づけ・不安・自信に関する研究も行われ、数多くの動機づけに関わる研究が行われた。

その後、1990 年代以降には、より教育現場に根差した動機づけ研究の必要性が問われるようになり、教育心理学を基盤とした研究が行われるようになった。自己決定理論(Deci & Ryan, 1985, 2002) , 帰属理論(Weiner, 1992), 期待価値理論(Eccles & Wigfield, 1985)などの教育心理学的理論が応用されるようになり、とりわけ、自己決定理論を中心とした教育心理学的理論を基盤とした研究が行われるようになった。これは実際の教育現場に根差した多様な動機づけを明らかにしようと試みたものである。自己決定理論とは、Deci & Ryan (1985, 2002) が提唱した動機づけ理論であり、内発的動機づけと外発的動機づけの概念を基盤とする。内発的動機づけは『何かをすること自体が楽しく満足が得られるのである活動』(Yashima, 2010)であり、外発的動機づけは『何か目的があってする活動の動機』(Yashima, 2010) である。内発的動機づけを高めるためには 3 つの心理的欲求の充足が必要であるといわれており、3 つの心理的欲求とは、自律性 (自ら進んで学習しているという認知)・有能性 (自分は学習ができるという認知)・関係性 (周囲と一緒に学習をしているという認知) である。なお、外発的動機づけは 4 つの動機づけの段階 (External regulation から Integrated regulation) があり、自己決定度の高低を想定することができるので多くの実証研究が行われてきた。

2000 年以降には、時間の経過に伴った動機づけの動的な変化を捉える研究が行われるようになり、時間の経過に伴う学習者の変化の傾向と変化のプロセスを捉える研究が行われつつある。更に、近年、新たな構成要素として、L2 Motivational Self System に関する研究もなされ、Future possible selves (可能自己)に関する研究が行われている。可能自己とは、L2 理想自己 (成りたい自分, ありたい自分), L2 義務自己(成るべき自分, あるべき自分), 努力 (Intended Learning Effort)から構成され、近年、L2 Ideal Selves と Ought-to-

selves の研究が行われている。Dörnyei (2005) によれば、L2 Ideal Selves と Ought-to-selves をより明確に持つと動機づけの効果を高め、自分の姿の中に L2 を使う自己像があれば、学習者を動機づける機能があると考えられる。

## 2.2 コミュニケーションへの積極性

文部科学省の外国語活動の目的がコミュニケーションへの積極性(Willingness to communicate: 以下 L2WTC)であることから、近年、第二言語習得時における L2WTC に関する研究が行われている。L2WTC の概念は、MacIntyre, Clément, Dörnyei, & Noels (1998) によって提案され、第二言語で他者とコミュニケーションを図ろうとする行為を概念モデル化している。モデルには、社会的・個人的コンテクスト、情動的・認知的コンテクスト、動機傾向、状況的要因、コミュニケーション行動への意志、コミュニケーション行動 (L2 使用)とピラミッド型のモデル化構造となり、コミュニケーション行動の複雑さを示している (八島, 2004)。この概念モデルは、カナダの社会心理学者の個人差要因に関する研究の系譜であり、異文化接触・態度、動機づけ、不安、自信などの研究の延長とされている。本概念は、第二言語習得分野においては、比較的新しい概念ではあるが、文部科学省の示す外国語活動の目的でもあるために、近年注目を集めている。

L2WTC に関する研究は国内外で行われており、MacIntyre & Charos (1996) のカナダにおける L2WTC モデルでは、学習意欲が L2WTC へと繋がり、L2WTC や L2 コミュニケーション能力の認知が L2 コミュニケーション頻度へと繋がると示している。国内でも、L2WTC に関する研究が行われ、大学英語学習者における L2WTC を Yashima (2002), Yashima et al (2004) では、共分散構造分析を用いて行なって分析している。日本人英語学習者においては、L2 WTC に繋がる重要な要因として、L2 コミュニケーションの自信であると述べている。また、Yashima (2002)の日本の EFL コンテクストにおける WTC モデルにおいては、国際的志向性も L2WTC に繋がる要因として、有意差を認めている。

## 3. 本稿の目的

本稿では、外国語活動における児童の動機づけと情意要因 (主にコミュニケーションへの積極性と異文化への関心) に焦点を置いて、これまでの国内における実証研究を総括し、教育的示唆、研究の限界点、そして今後の展望を述べる事を目的とする。実証研究の総括に際して、児童の動機づけと情意要因に関する研究を次の3つの視点から言及する。第一に、動機づけと情意的要因に関する基礎研究 (性差・年齢差の比較検討、活動時間増加に伴う変化)、第二に、自己決定理論の観点から検討した小学生の動機づけ：中学年と高学年の比較、第三に、児童を動機づける教育介入型研究：プロジェクト型授業実践と動機づけについて述べる。

#### 4. 動機づけと情意的要因に関する基礎研究： 性差・年齢差

公立小学児童を対象に主に動機づけ、異文化への関心、コミュニケーションへの積極性、不安、自信(Can-Do)に関する調査が蓄積されつつあり、性差と年齢差の特徴が明らかになりつつある。

性差においては、低学年・中学年・高学年ともに男子生徒よりも女子生徒の方が動機づけや情意的要因は高い傾向にあることが明らかになっている(Adachi, 2011b, Carreira, 2006a, Kunimoto, 2005, 2006, 2007, Nishida, 2008, 2011, 2012a, 2013, 西田, 2012)。例えば、小学校3校で調査した(Adachi, 2011b)では、女子の方が男子に比べ、有意に動機づけが高く、同様に身近な人々(友達、教師、親)の励まし、学習態度、異文化の人とのコミュニケーション態度のいずれも有意に高かった。Nishida (2011)の研究によれば、動機づけ、外国語への興味関心、不安、CanDo、コミュニケーションへの積極性、外国語活動のクラスの雰囲気について公立小学児童552名を対象に性差比較を行ったところ、女子生徒の方が男子生徒と比較をして、動機づけ、外国語への興味関心、CanDo、コミュニケーションへの積極性、不安の全項目において男子生徒よりも高い傾向にあることを示した。この結果は、Nishida (2013a)の性差比較において、女子生徒の方が男子生徒よりも動機づけや外国語への興味関心が高いという結果と同一の見解を示している。更に、西田(2012)では、5年生・6年生を対象に、自己決定理論に依拠した内発的動機づけ、自律性、有能性、関係性の動機づけに関する項目と異文化への関心、CanDo、コミュニケーションへの積極性、L2理想自己に関する調査を行った結果、5年生・6年生ともに、女子生徒の方が男子生徒と比較して、全項目において高い傾向を示していることを明らかにした。これらの結果を総括すると、外国語活動時における小学児童の性差比較に関しては、これまでの国内児童の研究において女子生徒の方が男子生徒と比較して動機づけや情意要因が高い傾向にあるという一定の見解を示していると言えよう。

年齢差については、例えば、Nishida (2008; 2011)を概観すると、動機や異文化への関心は、3年生～6年生までを比較すると、3年生の方がより高い数値を示し、6年生では低い数値を示している(Nishida, 2008)。Nishida (2011)でも同様に、3年生・4年生・6年生を比較検討した結果、動機づけ、異文化への関心、Can-Do、L2WTCにおいて、中学年の方が高学年と比較すると高い傾向にあることを明らかにしている。結果として、年齢差を比較すると、年齢が上がるにつれて興味・関心、動機づけが低下する傾向を(Carreira, 2006b; Carreira, 2012a, Carreira, 2012b, Nishida, 2008; Nishida, 2011, Adachi, 2011b) 捉えつつある。さらに、いくつかの研究で動機づけに影響を与える要因の年齢差について調べている。たとえば、Carreira (2012a) はどのような要因が児童の「英語学習に対する内発的な動機づけ」に関係しているのかを学年別に調べ、高学年になるほど「外国に対する興味」が「英語学習に対する内発的な動機づけ」に関係していることを明らかにしている。これらのことから Carreira は高学年では「外国に対する興味」を持たせることによって、「英語学習

に対する内発的動機づけ」を高めることができる可能性を示唆している。また、Carreira (2012b) は、小学生の英語学習に対する動機づけと学習全般に対する動機づけの関係を学年別に調べた結果、学年が上がるにつれて、「好奇心」が「道具的動機づけ」に影響を与えなくなる傾向があること、学校全般での学習を楽しんでいる小学 6 年生は英語学習においても高い動機づけを持つ傾向があること、さらに成績や将来のために学習している小学 6 年生は同様の目的で英語を学習し、また、外国への興味も高くなる傾向があることを示唆している。

## 5. 動機づけと情意的要因に関する基礎研究：活動時間増加に伴う動機づけと情意的要因の変化と動機づけモデル

外国語活動が 2011 年度に本格的に始まる以前にも、多くの公立小学校で、年間 10 数時間程度、外国語活動あるいは英語教育は実施されてきた。行事色の強い活動から、毎週実施される領域となったことで、児童の動機づけを初めとする情意的要因はどのように変わったのか、活動時間が増加した時期の児童の態度変化を見ることは、小学校の英語教科化の是非に関する知見となり得ると考えられたため、活動時間増加に伴って、動機づけや情意的要因はどう変化したかを中心に調査を行った。

まず、安達(2012a)では、1 小学校において英語活動が増えた時期に 3 年間の縦断調査を行い、1 年毎に動機づけや異文化の相手とのコミュニケーション態度の変化を分析した。その結果、英語学習増加に対する児童の関心、熟達願望などの動機づけに関する項目はやや低下傾向にあった。同様に対立関係改善や非言語のコミュニケーションなど、「異文化の人とのコミュニケーション態度」も減少していた。また、「動機づけ」に影響を与える要因を分析したところ、3 年間、共通して影響が大きかったのは、「学習意識」と学習者の「身近な人々」の励ましであり、「身近な人々」の影響は次第に強くなっていた。このことは、活動時間が増えると、児童は、教師や友達などの教室環境に影響を受けやすくなることを示した。

また別の小学校 3 校で調査した、Adachi(2012b)の動機づけモデルにおいても、「動機づけ」に影響を与えていたのは「学習意識」であり、これは、主に英語に対する自信、英語学習に対する努力信念に強い影響を与える概念であり、さらにこの「学習態度」には、「身近な人々」が強く影響していた。これらから、児童の英語に対する動機づけを高めるためには、積極的な学習態度を目指し、教師や友達が積極的に活動に関わり合える、より良い教室の雰囲気作りが求められ、活動時間を単に増やすだけでは、動機づけは向上しないと考えられた。

また、Adachi (2011a)では、安達(2012a)と同様、1 小学校において主に「異文化の人とのコミュニケーション態度」に焦点を当てて分析したところ、2 年間の縦断調査では、児童は英語の重要性意識を維持し、また見知らぬ人に対する警戒感は減少するなどの効果が

見られたが、自文化に対する重要性に減少傾向が見られた。また「異文化の人とのコミュニケーション態度」は、英語の母語話者に対する志向性だけでなく、多様な英語話者に対する志向性とも間接的に影響していたため、多様な言語プログラムがコミュニケーションスキル向上には重要と考えられた。さらに、Adachi (2013)では、同一小学校で、3年間に亘って「異文化の人とのコミュニケーション態度」の変化をより詳しく分析ところ、減少が見られたのは、男子で、女子の方はほとんど減少が見られず、また5年生よりも6年生に減少が見られた。また、このコミュニケーション態度に最も強く影響を与えていたのは、3年間とも「学習意識」であり、また3年目には、「身近な人々」の影響も強く現れた。

このことからすると、やはり動機づけ同様、異文化の人とのコミュニケーション態度も、単に外国語活動を増やすことでは向上せず、児童の学習態度が重要であり、また身近な人々の影響も時間数増加に伴い、強くなったため、学習環境が一層重要になると考えられる。以上から、動機づけおよび情意的要因は、外国語活動の内容や指導者の関わり方によって、大きく左右されると結論づけられる。

## 6. 自己決定理論の観点から検討した小学生の動機づけ

Carreira(2012)では、自己決定理論をもとに、心理的三欲求と動機づけの関係を調べ、さらに、Carreira(2013)では都内の公立小学校1校を対象に、自己決定理論をもとにモデルを作成し、中学年(小学3年生・4年生)と高学年(小学5年生・6年生)において動機づけに影響を与える要因がどのように異なるのかを明らかにするために多母集団同時分析を行った。その結果、「認知された有能性」から「内発的動機づけ」に対するパスは高学年の係数がより高く、「教師の励まし」から「内発的動機づけ」に対するパスは中学年の係数がより高いことがわかった。これらのことから中学年の発達段階にある児童は教師の自律的支援が児童の英語に対する動機づけにより大きな影響を与え、一方、高学年の発達段階にある児童においては英語学習に対する動機づけを高めるには自分は英語ができるという有能感がより重要な役割を示すということが明らかになった。さらに、カレイラ(2013)は自己決定理論をもとにした動機づけと心理的三欲求がどのように変化するかを4年間の縦断調査により調べた結果、動機づけは種類にかかわらず、減少していきことがわかった。一方、心理的三欲求に関しては、自律性と有能性の欲求は4年間で有意な変化は見られず、関係性の欲求に関しては小学4年生で有意に一時上昇したが、小学5年生で有意に減少していた。さらに、動機づけ尺度と心理的三欲求の尺度の関係を学年別に調べた結果、内発的動機づけに関しては、どの学年でも概して自律性の欲求、有能性の欲求、関係性の欲求と正の関係が見られることを明らかにしている。

## 7. 児童を動機づける教育介入型研究：プロジェクト型授業実践と動機づけ

次に、動機づけを高めると考えられる教育的介入を言及し、研究成果に関する報告を行

う。プロジェクト型授業とは発信型で主体的な学習方法であり、プロジェクトを実施した結果として、これまでに肯定的な変化を認めた教育介入型実証研究が報告されている(八島・廣森・前川・西田, 2009)。Nishida (2013ab), Nishida and Yashima (2009, in press)によれば、歌を歌う事が好きで劇をする事が好きな小学5年生の児童を対象に、ミュージカルのプロジェクト型授業介入を行った。質問紙には自己決定理論に依拠した内発的動機づけ、内発的動機づけを高める3つの心理的欲求(自律性、有能性、関係性)、コミュニケーションへの積極性に関してミュージカルの事前・事後に調査を行った。対応のある  $t$  検定を用いて検証を行った結果、内発的動機づけを高める3つの心理的要因である有能性、自律性に顕著な肯定的な変化が見られ、コミュニケーションへの積極性にも肯定的な変化を認めた。関係性においては、顕著な変化は認められなかったものの、他変数よりも高い数値を事前・事後に示しており、教師や生徒同士の関係性の構築がある中でプロジェクトが行われた事が明らかになっている。ミュージカル事後の共分散構造分析においても、内発的動機づけに向かう自律性と有能性のパス係数に有意差を認めた。その後のビデオ解析による質的研究においても、教師が児童を援助しつつ自律させていく姿が浮き彫りとなっている。

この他に、Nishida (2013c)は、学期末にプロジェクト型授業を組み込んだカリキュラム構想を行った公立小学校を対象に動機づけ、異文化への関心、コミュニケーションへの積極性、CanDo、L2理想自己、リスニングテストを実施した。調査対象校のカリキュラム構想では、Hi Friends 1&2を通常授業に取り入れながら、学期末にミニプロジェクトを組み込んでおり、プロジェクトの内容は「Making a picture book」「Group presentation activity」「Making a play」であり、各グループが絵本を作る、プレゼンを実施する、劇を考えるとといったプロジェクトを学期末に行っていた。各プロジェクトに要した時間は4時間ほどである。このカリキュラム構想を用いた結果、5年生と6年生の児童において全項目とリスニングテストにおいて肯定的な変化を認め、反復測定 of  $t$  検定の結果、有能性、CanDo、リスニングテストに統計的有意差を認めている。質的研究(観察記録・面接)においても、教師らが児童に必要な足場をかけながら(scaffolding)、児童の発話を促す様子が浮き彫りとなり、ALTの面接においては担任教師らに児童の好む活動や傾向を伺いながら、授業計画を立てていることが明らかになった。

さらに、内容重視の授業(Content-based instruction)を用いたプロジェクトを行った公立小学校においても、その効果が報告されている。Carreira (2008)では、3日間に渡る内容重視授業(家庭科・社会科・英語の教科横断)を行った結果、事後の調査において、児童の知的好奇心や外国に関わる変数に肯定的な変化を認めた。同様にNishida (2009)においても、7日間に渡るプロジェクト型授業(社会科・図工・英語の教科横断)において、知的好奇心、動機づけ、自信、L2WTCなどの心理的要因に肯定的な変化を認め、特に男子生徒において肯定的な変化があることを示した。

Nishida (2012, in press)では、通常のカリキュラムを用いて、1年間を通した縦断的調査

を行った結果、児童の動機づけ、他教科・言語や文化への関心、コミュニケーションの積極性、CanDo が全体として低下する傾向にある、或は学級単位においては動機づけや情意要因が維持できる学級もあれば低下する傾向にある(Nishida, 2013c, in press)と示した。しかし、上記に示すようにプロジェクト型学習を組み込んだ外国語活動を行う公立小学校においては動機づけや情意要因が肯定的な変化を示す傾向を認め、その変化の傾向を捉えつつある。

## 8. 教育的示唆

これまでの研究成果から、次の教育的示唆を提示することができよう。第一に、プロジェクト型授業を行った結果として、児童の動機づけや情意要因に関して肯定的な変化を認めていることから、1年間のカリキュラム構想をするにあたり、プロジェクトを学期末や年度末などに導入することが考えられよう。更に、内容重視のアプローチを取り入れた授業実践においても、知的好奇心などに変化を認め、動機づけや情意要因が低いと考えられる男子生徒においても、肯定的な変化を認めていることから、社会科などとリンクづけるような授業が考えられよう。第二に、外国語活動において児童を動機づける要因が、自律性、有能性、関係性の充足、とりわけ、教師やクラスメートとの関係性の構築が重要であると考えられる。外国語を「できる」と認知することが、L2WTC や動機づけに影響があると考えられるので、児童が「できる」と感じることができるよう、児童に必要な「足場をかけ」や「褒める」ことも重要な要因であると考えられよう。

## 9. 研究の限界点

これまでの実証研究の限界点は、今までの研究が1校や一地域に限ったものが多く、一般化が難しいことから、より一般化するためには、全国的な規模での調査が必要であろうと考えられる。また、多くの量的調査が行われてはいるものの、質的調査に関する実証研究が数少ないという点が挙げられる。教室内をより精緻に微視的に捉えるために、質的調査方法を用いて、児童や教師に関する動機や情意要因に関わる実証研究を行っていく必要がある。

## 10. 今後の展望

今後の展望として、上記の掲げる研究を概観すると、外国語活動の体験が増えるに伴い、児童は動機づけや関心が低下する傾向にあると考えられる。特に、女子に比べて男子、また中学年に比べ高学年では、より動機づけや興味を持続させるのが難しくなる。また、異文化の人とのコミュニケーション態度にも今のところ向上は見られない(Adachi, 2011a, 安達, 2012a)。今後は、動機づけや関心、コミュニケーション態度についてのさらなる研究、また男子や高学年でも動機づけや関心を維持できる教育方法についての研究が求められる

だろう。更に、次の課題が考えられる。1) 教科化の前に、評価というものをどう扱い、評価を取り入れた際に情意面に与える影響はどのようなものか、調査を行っていく必要がある。2) 小中の連携における動機づけの低下をいかに防ぐかを研究することが重要である。3) 教師やクラスメートとの関係性をどのように構築すべきか、求められるコミュニケーション力とはどのようなものかについても検討し、解明していく必要がある。

## 11. 結語

本稿では、小学校外国語活動における動機づけを基盤とする基礎研究・教育介入型研究の蓄積について概観し、教育的示唆、研究の限界点、今後の展望について述べた。基礎研究では、外国語活動に対する動機づけや関心など肯定的な態度の維持が難しいことが示唆されたが、教育方法(意図的なプロジェクトのような教育的介入)によって児童の動機や関心が変化する可能性があることも捉えつつある。また、社会的要因(ダイナミクス:担任や生徒同士の関わり)が外国語活動における動機や関心に影響がある可能性も示した。日本における小学校外国語活動では、①英語力の発達は目標ではなく、②日常接しない言語に対する動機づけの必要があり、③他者との関係性の影響は社会文化的にも強い面があることから、動機づけや情意的要因に焦点を当てた研究と実践が一層望まれる。今後の発展的展開としてより効果的な教育的介入(カリキュラム構想やよりよい教授法の確立)を模索し、よりよい関係性(教師・生徒)を構築していくことが重要であると考えられる。今後、さらに、より多くの実践報告と実証研究を蓄積していくことで、望ましい小学校外国語活動を期待することができよう。

## 参考文献

- 安達理恵(2012a). 外国語活動時間増加に伴う小学生の動機づけとコミュニケーション態度——小学校での長期的調査事例研究——. 中部地区英語教育学会紀要第41号, 125-130.
- カレイラ松崎順子(2013). 小学生の英語学習に対する動機づけの縦断調査. 統計数理研究所共同研究レポート 301,1-54.
- ベネッセ教育開発センター (2010) 『第二回小学校英語に関する基本調査(教員調査)報告書』 Retrieved from [http://benesse.jp/berd/center/open/report/syo\\_eigo/2010/index.html](http://benesse.jp/berd/center/open/report/syo_eigo/2010/index.html)
- 西田理恵子(2010). 小学校外国語活動における内容重視のアプローチ:「地球博」の試み, JES (10), 1-6.
- 西田理恵子(2012). 小学校外国語活動の理論と実践 I: 内容重視のプロジェクトを中心に. 豊能町教育委員会. 豊能町立東ときわ台小学校教員研修. 8月28日
- 八島智子 (2004). 外国語コミュニケーションの情意と動機. 関西大学出版.

- 八島智子・廣森友人・前川洋子・西田理恵子(2009). プロジェクト型授業による英語学習動機の変化：実践と研究の融合をめざして. 第 49 回全国研究大会 外国語教育学メディア学会 (LET) 流通科学大学
- Adachi, R. (2011a). The effect of increased English activities on sociocultural attitudes and intercultural communicative attitudes of young Japanese learners. *JACET Journal*, 52, 1-18.
- Adachi, R. (2011b). The difference of sex and age on motivation and sociocultural attitudes among Japanese young EFL students. The 9th Asia TEFL International conference, Seoul, Korea. July 28th.
- Adachi, R. (2012b). A motivational model in Japanese elementary students' foreign language activities. *Language Education and Technology*, 49, 47-64.
- Adachi, R. (2013). Pupils' changes in communicative attitudes toward English activities -A case study at a Japanese elementary school. *ARELE*, 24, 221-233.
- Carreira, M.J. (2006a). Developmental trends and gender differences in affective variables influencing English as a foreign language learning among Japanese elementary school pupils, *JASTEC Journal*, 25, 57-74.
- Carreira, M.J. (2006b). Motivation for learning English as a foreign language in Japanese elementary schools, *JALT Journal*, 28, 135-157.
- Carreira, M.J., Ohkubo, N., Akiyama, M., & Tanabe, S. (2007). Content-based approach in elementary school English education: international understanding in the period for integrated study. *Language Education and Technology*, 44, 1-21.
- Carreira, M.J. (2011a). Relationship between motivation for learning EFL and intrinsic motivation for learning in general among Japanese elementary school students, *System*, 39, 90-102.
- Carreira, M.J. (2012a). Affective factors contributing to intrinsic motivation for learning English among elementary school pupils in Japan, In Muller, T, Herder, S., Adamson, J., & Brown, P.S. *Innovating EFL Education in Asia*, pp.239-248, Palgrave Macmillan, London.
- Carreira, M.J. (2012b). Motivational orientations and psychological needs in EFL learning among elementary school students in Japan, *System*, 40, 191-202.
- Carreira, M.J. (2013). Motivational model of English learning among elementary school students in Japan, *System*, 41, 706-719.
- Deci, E. L., & Ryan, R.M. (1985). *Intrinsic motivation and self-determination in human behavior*. NY: Plenum.
- Deci, E. L., & Ryan, R.M. (2002). *Handbook of self-determination*. Rochester: University of Rochester Press.
- Eccles, J.S. & Wigfield, A. (1995). In the mind of the actor: The structure of adolescents' achievement task values and expectancy-related belief. *Personality and Social Psychology*

*Bulletin*, 21, 215-225.

- Kunimoto, K. (2005). A study on the psychological factors of primary school fourth-grade learners of English. *The Japan Association for the Study of Teaching English Children*, 24, 41–55.
- Kunimoto (2006). Effects of interest in English on learning motivation of English of fourth and fifth graders. *The Japan Association for the Study of Teaching English Children*, 25, 75–87.
- Kunimoto (2007). What variables does the perceived competence of young English learners consist of?: A comparison between 4th and 5th graders. *Kyouiku kenkyujournal*, 3, 211–221.
- MacIntyre, P. D., Clément, R., Dörnyei, Z., & Noels, K. (1998). Conceptualizing willingness to communicate in a L2: A situational model of L2 confidence and affiliation. *The Modern Language Journal*, 82, 545–562.
- Nishida, R. (in press). Focusing on a class factor and possible influence on teachers' attitude on foreign language activities in a longitudinal analysis.
- Nishida, R.(2008). An Investigation of Japanese Public Elementary School Students' Perception and Anxiety in English learning: A Pilot Study comparing 1st to 6th graders, *LET* (45), pp.113-131
- Nishida, R.(2009). Exploring content based approaches to young learners, *JES* (9),pp.39-46.
- Nishida, R. (2011). Elementary School Pupils' Motivation and Affective Variables in Foreign Language Activities as Related to Annual Hours of English Instruction, *LET Kansai Chapter*, 1-15.
- Nishida, R. (2012a). A Longitudinal Study of Motivation, Interest, CANDO and Willingness to Communicate in Foreign Language Activities among Japanese Fifth-Grade Students. *Language Education and Technology*, 49, 23-45.
- Nishida, R. (2012b). Project-based teaching practice in the Japanese elementary school EFL
- Nishida, R. (2013a). Empirical studies of affective variables and motivational changes among Japanese elementary school EFL learners. Kinseido: Tokyo.
- Nishida, R. (2013b). A comprehensive summary of empirical studies of motivation among Japanese elementary school EFL learners. In M.T. Apple, D.D. Silva & T. Fellner. (Ed). *Foreign Language Motivation in Japan* (pp.93-109). Multilingual Matters. Bristol: UK.
- Nishida, R. (2013c). A longitudinal analysis of fifth and sixth graders of psychological factors and listening abilities among Japanese elementary school EFL learners. Paper Presentation. The British Association for Applied Linguistics (BAAL), Harriot-Watt University, Edinburgh, the UK.

Nishida, R. and Yashima, T. (2009). An investigation of Factors Concerning Willingness to Communicate and Interests in Foreign Countries among Young Learners, *Language Education and Technology* 46, pp.151-170.

Nishida, R. and Yashima, T.(in press). The enhancement of intrinsic motivation and willingness to communicate through a musical project in young Japanese EFL learners.

Ushioda, E. & Dörnyei, Z. (2009). Motivation, language identities and the L2 self: A theoretical overview. In Z. Dörnyei, & E. Ushioda (Eds.), *Motivation, language identity and the L2 self*. Bristol: Multilingual Matters

Weiner, B. (1992). *Human motivation: Metaphors, theories, and research*. Newbury House. CA: Sage.